

2025年度博物館実習報告

岡田 夏蓮^{*}、小野 真彩^{**}、西村 日和^{*3}、羽原 千就^{*4}、
本山 礼佳^{*4}、鷲尾 心純^{*5}、渡部 義弥^{*6}、上羽 貴大^{*6}

概要

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の有資格者になるのに必要な博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。2025年も9月12日～18日に6名の学生を受け入れ、実習を行った。主たる実習は展示を1点選んでのギャラリートークであった。本稿では、実習の概要と全体のまとめ（おわりに）について指導者が述べ、各節では、それぞれの実習生の実習を通じての体験や考察を、明確なタイプ修正以外は、原稿ママにて報告する。

1. はじめにー実習の概要

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の資格取得に必要な大学単位になる博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。これは館が開館した1989年の翌年、1990年度に最初の受け入れを行い、当初は1～2名程度だったが、希望者が増えてきたことから、おおむね5名程度を受け入れてきている。

受講者は、理系で科学館の展開している分野を専攻しているものとしており、従来、理系で学芸員資格の取得希望者が少なかったことからおさまっていたが、この年は10名以上の希望者があり、選考のうえ7名（1名は辞退で結果6名が実習）にせざるをえなかった。主として活動場所の問題である。

実習は、後の節で各実習生も記載しているが、大阪市立科学館や博物館に関する講話、展示ほか事業の見学、始業点検の見学・体験を行い、取り組みとして来館者に対するギャラリートークを行った。実習時間は毎日朝9時～17時30分で行い、最終日の発表会は閉館後に行ったので18時を回った。

個別のスケジュールは表1. のとおりである。なお、日々の全体の指導統括については、初日、2日目、3日目のはじめと最終日の一部は渡部、3日目の途中から最終日まで上羽が担当した。

指導は、本稿執筆の学芸員渡部・上羽をはじめ、館長以下学芸員全員が行い、また表1にあるように

表1. 実習スケジュール

毎日、朝礼（OR）と終礼を行い、2日目からは学芸員の展示場やプラネタリウムの始業点検に立ち会った。また、毎日昼頃、学芸員との談話の時間を設け、学芸員がそれぞれの考えにしたがって、学芸員の仕事を話、質疑応答を行った。なお、表中 GT はギャラリートークのことである。

9月	AM	PM
12日（金）	ガイダンス 館長講話：科学館について1 館内見学（展示）	館内見学（プラネタリウム） 館内見学（バックヤード）
13日（土）	始業点検 OR サイエンスショー見学（11時）	学芸課長講話：科学館について2 GT 展示選び
14日（日）	始業点検 OR、GT	GT
15日（月・祝）	始業点検 OR、サイエンスガイドとの交流	GT
16日（火）		
17日（水）	始業点検 OR・GT	GT
18日（木）	始業点検 OR・GT	発表会、記念撮影

^{*}岡山理科大学、^{**}奈良女子大学、^{*3}愛媛大学、^{*4}神戸大学、^{*5}和歌山大学、^{*6}大阪市立科学館

サイエンスガイドリーダーおよびガイド、科学デモンストレーターにも講話をお願いした。

これらの実習を経て、どのようなことを取得しあるいは感想を持ったのか、以下、各実習生からの報告を記載する。

2. 実習生 岡田夏蓮の報告

2-1. はじめに

私は、博物館学芸員という仕事に興味があり、自分の専門知識を応用し、科学の魅力を伝える場として科学館での実習を志望した。

実習に参加するにあたって、私は2つの目標を掲げた。

①現場の職員の方々の仕事に対する工夫や、考え方に触れ、科学館および学芸員の役割について理解を深めること

②実際に来館者と積極的にかかわり、科学への興味や疑問を引き出す方法を学ぶこと。

2-2. 実習内容

実習では、以下の活動を通して科学館学芸員という仕事について学習した。主な活動は次のとおりである。

- ・学芸員やサイエンスガイドの方の講話
- ・館内見学(展示場およびバックヤード)
- ・始業点検の見学・体験
- ・サイエンスショーの見学
- ・ギャラリートーク

これらの活動を通して、科学館の運営には綿密な計画や外部との連携が必要であることを学んだ。また、来館者への解説においては、学芸員が来館者の視線に立って伝え方を工夫しながら展示の価値を共有することが重要な役割であることを理解した。

2-3. ギャラリートークの様子

実習の課題として「ギャラリートーク」が与えられた。

私は、ギャラリートークの対象として4階展示場にある「霧箱」を選んだ。選んだ理由は大学院で放射線について学んできたため、その知識を活かせると思ったことと、展示を見学した際に、霧箱を訪れた来館者が内容を十分に理解できていない印象を受けたため、少しでも興味を持ってもらいたいと思ったことである。

3日目から本格的に来館者に向けてギャラリートークを実施した。私は「見えないものを見えるようにする」という点に霧箱の魅力があると考え、それをテーマに話を構成した。しかし、自分が「面白い」と感じる内容で

あっても、来館者にとってはそうではない場合があったり、「放射線」とはそもそも何なのか知っている前提で話してしまったりすることがあり、来館者の理解度に応じた対話的な説明が不足していた。

その後、他の実習生やサイエンスガイドの方のギャラリートークを見学し、来館者がどのような話題に興味を持ちやすいのかを観察した。生活の中の身近な例を交えて話す様子と、質問ベースで話す姿が印象的だった。私もそれを参考に、近くの X 線の展示を活用しながら、レントゲンなど放射線の身近な利用例を紹介したり、「霧箱で見えている軌跡は、実際に私たちが日常的に浴びている放射線のものだ」と伝えたりした。すると、関心を示す来館者が増え、そこから自然に質問や会話が生まれるようになった。ただし、子どもたちにとってはそれでも内容が難しく感じられる部分も多かったため、わかりやすいイラストパネルやクイズなどを用いて、より親しみやすくなる工夫をすればよかったと感じた。

この経験を通して、来館者がどのような点に興味を持っているのかを考えることの重要性を学んだ。また、それに応えるためには、専門的な知識から身近な例まで幅広い引き出しを持つことに加え、来館者の反応や発言をよく観察し、柔軟に対応する力も大切であると感じた。

2-4. 最後に

今回の実習を通して、学芸員は、展示の維持や解説にとどまらず、来館者の関心に寄り添いながら、展示を通してともに考える存在であることを実感した。教職課程を履修していたこともあり、「学校と科学館の違いとは」という講話は印象に残っている。科学館が教育機関とは異なり、来館者への明確なゴールは必要とせず、自発的な問いを出発点とする場であり、自由に開かれた場所であることに気づかされた。学芸員は、先生のように教えるのではなく、来館者とともに展示を楽しみ、問いを育てるような立場にあると感じた。

来館者との関わりについては、ギャラリートークの経験が大きな学びとなった。最初は「ここまで説明すれば伝わるはず」と無意識のうちに話のゴールを定めてしまっていたが、実際には来館者の反応によって話の流れが変わり、思いがけない質問や視点に出会うことが多かった。専門的な知識を一方的に伝えるだけでは関心を引き出すことは難しく、身近な話題や対話を通じて、来館者自身の疑問を引き出す工夫が必要だと感じた。科学館でのコミュニケーションは、知識の伝達ではなく、関心のきっかけをつくることに重きが置かれていると感じた。

大阪市立科学館での実習で学んだことはこれからの研究や社会との関わりの中でも活かしていけると感

じている。さらに、実習中には学芸員の方々からたくさんのご指導をいただき、その姿勢や考え方に触れることで、学芸員という職業への理解が深まった。現場での関わりを通じて、学芸員になりたいという気持ちがより強くなった。

3. 実習生 小野真彩の報告

3-1. はじめに

科学館の学芸員の仕事について知りたいと思い、6日間の実習に参加させていただいた。実習では全体課題として主にギャラリートークを行い、その他展示やバックヤードの見学、始業点検、講話、ボランティアの方々との交流などを通して科学館および学芸員の業務に触れることができた。以下にその内容と感想を報告する。

3-2. 展示場の見学と講話

初日に館内案内で展示場を見学した際、一部の展示を解説していただいた。その中で特に天の川銀河の模型についての解説が印象に残った。この展示は「天の川銀河の隣のアンドロメダ銀河は、この縮尺で10メートル先にある」という説明に対して、実際に10メートル先に同じ縮尺のアンドロメダ銀河が展示されている。地球から見た星空は実際どのような姿で、さらにその先はどうなっているのか、周囲の展示とも関連して宇宙のスケールを体感できるよう工夫されていることをお客様にも伝えたいと思い、展示を選ぶきっかけとなった。

講話で大阪市立科学館についてのお話を伺い、「科学を楽しむ文化の振興」を目標としていることを知った。例えば電磁気のような教科書だけではイメージしにくい物理現象を、視覚、触覚を使い体験できる展示が多くあり、楽しめるような工夫がされていた。学習の到達目標が無く自分のペースで学べることも学校と違う点である。実際にお客様が楽しみながら体験している様子も何度も見かけることができ、自由に科学を楽しんで欲しいという科学館の想いが、展示場からお客様にも伝わっていると感じた。

3-3. 展示場の見学と講話

ギャラリートークは任意の展示を選び、その意図や使い方を理解し、価値の伝え方を考え、実践し、対人スキルやプレゼンの工夫等を学ぶ事が目標だった。展示を見学しているお客様に話しかけ、解説を行った。展示は3-2でも記述した4階の天の川銀河の模型を選択した。宇宙のスケールの大きさや、視点を変えることで円盤型の銀河が天の川として見える驚きを来館者に共有したいと思いこの展示を選んだ。

ギャラリートークは四日間行われ、二日間は連休で

家族連れのお客様が非常に多く、その後平日の二日間は、午前には社会見学の小中学生、午後に大人や外国人観光客が多かった。短期間で大きく客層が変わったため、相手によって話し方や説明の言葉選びまで変えていく必要があった。特に小学生への解説が難しく、展示に興味を持ってくれている普通の説明では飽きてしまいすぐに移動してしまうことが多かった。

そこで、学芸員やボランティアの方に、まずは展示の見方や問いかけなど、相手との会話を意識することで興味を持ってもらいやすいとアドバイスをいただいた。いきなり一方的に説明するのではなく、「太陽系は見つけられた?」「横からものぞいてみて」など、まずは一言声をかけ、お客様と同じ視点になるようしゃがんでジェスチャーも交え会話をしよう心掛けた。そうするとお客様の表情もわかりやすく、横から見た模型の綺麗さに驚いてくれる方も少なくなかった。そこから余裕をもって次の説明に移ることができ、相手の興味に応じて、銀河系の形や、天の川の正体、アンドロメダ銀河の展示など、話題を少しずつ広げていった。最後は他展示との関連も説明しつつ、次の展示である宇宙の大規模構造の模型の「ひとつひとつの点が銀河」であることを伝え誘導していった。お客様とやり取りさせていただく中質問に答えられない事もあり、自分の知識不足を反省すると同時に常に知識のインプットや新しい発見に目を向けていく必要もあると思った。

ギャラリートークでは、お客様が楽しく科学に興味をもち深めてもらうよう微力ではあるがお手伝いができ、やりがいを感じた。そして四日間試行錯誤していくなかで、対人スキルの向上や積極性も生まれ、とても勉強になった。

3-4. 展示場の見学と講話

六日間の実習を終えて、自分は今まで鑑賞する側であったが、科学館の裏側や展示の工夫を知り、学芸員の方をはじめ職員の方の「科学を楽しむ文化」を推進していく想いの強さや努力を知った。

実習での経験は今後様々な機会を活かせる貴重な時間だったと感じると同時に、ご指導いただき感謝申し上げます。これからも来館者が増え、大阪市立科学館が学びの場としてもっと活用されることを望みます。

4. 実習生 西村日和の報告

4-1. はじめに

科学館の学芸員、自分自身の専門分野である物理学や天文学の学芸員として目指すべき姿を学びたいと思い、大阪市立科学館での博物館実習に参加させていただいた。

実習の内容は、始業点検の参加、館内の展示場・

バックヤードや館外の見学、講話の聴講、懇談、実習の課題として展示場でのギャラリートーク(展示品の解説)であった。

以下に、実習内容や感想を報告する。

4-2. 館内の見学

来館者として訪れた時には気づけなかったことや工夫がなされていることを知ることができ、来館者と職員の見え方の違いを感じることができた。館内の安全面に配慮した工夫の中で特に印象に残っているものは、職員はエスカレーターでの移動中、ハンドレールを掴み立ち止まるということである。展示場の順路内にエスカレーターでの移動が頻繁で、学校行事として児童の来館が多いからこそ、エスカレーターは足を止めて利用するという職員の行動にも配慮があることは新しい学びだった。

4-3. 講話や学芸員の方々との懇談

館長の講話「大阪市立科学館の概要と科学館学芸員」は、大学で学べなかった科学館や科学館学芸員についての内容だけでなく、科学館の展示に対する考え方や大阪市立科学館のコンセプトを聞けて非常に勉強になり楽しかった。展示品やサイエンスショーが、科学を楽しんでもらうということの難しさに対する大阪市立科学館の現時点での答えである、と理解できて面白かった。学芸課長の講話「地方独立行政法人 大阪市博物館機構」では、自分の博物館経営論に対する勉強不足を実感したり、博物館が抱える課題を知ることができて、両者の講話によって科学館の理想と現実を学び、内部から見た科学館について考えることができて良かった。

学芸員の方々との懇談では、ギャラリートークの手順やその意図などを学ぶことができた。特に勉強になったことは、来館者に展示の面白さを伝えるだけでなく、来館者自身が「気づき」を得るという経験を促すことができれば良いということである。正解はなくても、来館者ひとりひとりにとって最良な対応をしようと、実習の課題へのモチベーションになった。また、学芸員を目指すにあたって気になっていたことを質問することができ、実際に働いてきた方々の声を直接聞くことで、学芸員が1つの職業であることを改めて認識し、自分の将来について考えることができた良い機会だった。

4-4. ギャラリートーク(展示品の解説)

実習の後半は、展示場4階の「ケプラーモーション」についてギャラリートークを行った。興味のある展示は他にもあったが、比較的得意な力学の分野で既に持っている知識を使える展示という理由で決めた。ただ、

展示品の勉強をする時間があまり取れず、指導者の方と他の博物館実習生の前でお試しギャラリートークをした時は、展示が見せる現象と知識との結びつきや来館者の「気づき」を促す工夫を用意できなかった。

結びつきについては「ケプラーモーション」は、発射されたボールがただ回っているだけではなく、天体の動きもボールの動きと同じ原理であるという指導者の方のアドバイスを基に、内容を組み立てることができた。「気づき」を促す方法としては、観察してもらうことと問いかけることを実践した。お試しギャラリートークで、展示の操作方法を説明するのが良いと言ってもらえたので、操作方法的説明に繋げて、ボールが発射されて回り落ちる様子をしばらく見てもらう時間を作った。話している時なるべくボールの動きに目が行くように解説した。また、学校行事の関係で小・中学生が多い日があり、話しかける言葉は短いながらも展示に目を向けてもらうためにどうすればよいかを考えて、取っ掛かりに「ボールの動きは何かの動きを表しているけれど、何だと思う?」と尋ねたら反応が良く、子ども相手に限定する必要はないと考えて年齢層は関係なく、基本は問いかけから始め、興味を示してくれた来館者には問いかけを加えるという流れを作ることができた。

ギャラリートークをしていくうちに一連の流れは出来上がっていったが、来館者の反応や質問によって話のネタは回数を重ねるごとに増え、引き出しをたくさん持つことで来館者に合わせて内容を変えることができた。最終日まで何回やっても自分の知識不足を感じながら、自分が持つ知識量は多く詳しくあればあるだけ良いが、それを全て来館者に話すのは違って、専門的であればいいというわけでも、長時間話せばいいというわけでもないのが難しく面白いところだと思った。また、小学生の集団相手に、回っているボールに注目してもらうため、ボールが何秒回っているかを考えてもらってから声に出してカウントすると、観察してもらえたり周りの人の興味も引くことができていたりして、少し学術的な話をする場合と目的は同じなのに方法は全く違って、ギャラリートークはとても自由だと思ったし、来館者と展示の間に学芸員という人が介在することの大切さを感じられた。

4-5. 最後に

学芸員という職業の面白さ・楽しさ、大変さを感じたり、ギャラリートークの魅力を知ったり、科学館ならではの様々な事柄を多角的に学ぶことができ、とても勉強になった一週間だった。他者に何かの面白さを伝えたいと思う機会は今後もあると思うので、その時は、自分も楽しむことを忘れずに、他者に「気づき」を促すため

にはどうすればよいか、いい時間だったと思ってもらうための伝え方は何が最適か、などを考えたいと思う。

5. 実習生 羽原千就の報告

5-1. はじめに

大学の講義では、美術を専門とした講義が多かったため、科学館学芸員について知りたいと思い今回の実習に参加させていただいた。実習では展示場及びバックヤード見学、講話、学芸員やサイエンスガイドの方々との懇話を通して科学館での業務内容について学ぶことができた。また、課題としてギャラリートークを行なった。以下にその内容と感想を報告する。

5-2. 見学

館内の見学では、学芸員の方から「施設の違和感に注意を向けてほしい」との指摘を受けた。館内の設備や案内といったものは、来館者が快く過ごせるような様々な工夫がされている。それら背景を聞き、自分が何度も訪れていた場所にも知らぬ間に改善が積み重ねられてきたことを知り、学びとなった。また、当館は体験型展示が特徴であるため修理が必要となることも多い。そのため、展示のそばに修理道具を違和感なく設置するなど、外観上の工夫も見られ、非常に興味深かった。修理は学芸員の重要な業務の一つであり、展示物に対する深い理解が求められる。見学を通して来館者によりよい学びを提供するためには、展示・資料の内容価値含めしっかりと理解をし、自らの知識を深めていくことの大切さを改めて感じた。

5-3. ギャラリートーク(展示品解説)

今回の実習では、展示場内の展示物を決め、それについてのギャラリートークを行った。私は大学での研究分野が室内実験を通して惑星の起源や進化を研究していることから、関連性のある展示場4階の「隕石展示」について、来館者に展示の解説を行った。来館者は展示を単に見て終わることが多いため、展示説明だけでは伝えることができない展示の面白さをギャラリートークによって、一つでも何か学んで帰っていただけるように意識した。隕石展示は、実際に触って体験できる二つの鉄隕石に加え、様々な種類の隕石、また一部の隕石に含まれる物質であるコンドリュールを顕微鏡で拡大して見られる展示で構成されている。鉄隕石では、いつ落ちたのか、表面や断面の構造についての解説などがされている。来館者は隕石を見て触るが、触っている石が隕石という認識程度で他の展示に行ってしまう方が多い。そのため、隕石は鉄でできている、展示されている隕石が隕石全体であるといった認識の誤解を生みかねない。しっかりと解説を全て読め

ばこうした誤解は生じないが、来館者が読み切るとは限らないため、私がギャラリートークで伝えたいと特に感じた。

4日ほどトークを繰り返し、どうしたら興味をもって見てもらえるか、疑問を引き出せるかを、学芸員の方のサポートのもと考えた。というのも、他の体験型展示と異なり、触るだけといった地味な展示となっているため、なかなか隕石について考えてもらう過程までが遠くなりがちであるからだ。最初は隕石に触っている来館者に隕石についての情報を小出しに伝えていたが、反応はそこまで強くなかった。学芸員の方が身近なもの・ことにつなげてあげると良いとアドバイスを下され、実際に身近な石とどう違うのか、重さや硬さの観点から来館者とお話をし、そこから話を広げていくスタイルにすると興味を引くことができ、トークスキルの学びにもなった。鉄隕石の説明ではウイドマンシュテッテン構造も紹介されていたが、実際に展示されていることを知らないままの来館者も多いので、適宜誘導し、鉄のサビに関しての話につなげるといった関連性で実践を通して説明できるようになったのは良い点である。また、来館者は子供からお年寄りまで幅広い年層やバックラウンドを持っているため、相手に合わせて説明の言葉選びも必要であり、例えを使うなど効果的だと感じた。

最終日に、学芸員の方々の前でギャラリートークを行った。来館者役をしてくださった学芸員はたくさん質問を投げかけてくださったが、実際にはそのような来館者と話をしたことがなかったため、質問されて答えるといった情報の交換となってしまった点は反省点である。質問に答える前に、来館者に考えるという時間を作って、記憶に残るようなギャラリートークをしていきたい。

5-4. 最後に

実習は講話や科学館学芸員の実態といったことまでさまざまなお話を伺うことができた。特にメインとなったギャラリートークでは、サイエンスガイドや学芸員の方々から丁寧なご指導をいただき、トークスキルの向上だけでなく、展示資料とどのように向き合うべきかについて深く考えさせられた。

最終日の発表後にはフィードバックをいただき、自分が資料の内容価値を十分に理解しきれていなかったこと、またご指摘いただいた観点への配慮が不足していたことを痛感した。今後、研究や発表などの場面で内容の理解を深め、人に伝える力を磨くために、この経験を通して学びえたことを活かしていきたい。

6. 実習生 本山礼佳の報告

6-1. はじめに

大学の講義では、美術館や歴史系博物館に関する

内容を扱うことが多く、科学館における学芸員の業務について理解を深めたいと考え、本実習に参加した。また、科学館ならではの展示や体験型展示の管理における工夫を学ぶことも目標として設定した。本実習の内容は以下の通りであった。

- ・展示場、プラネタリウム、サイエンスショー、バックヤードの見学
- ・始業点検への同行
- ・サイエンスガイドとの交流
- ・館長および学芸員による講話
- ・ギャラリートーク

以下に、本実習を通して感じたこと、工夫したことを述べる。

6-2. 見学、講話

始業点検では、展示についているワイヤーが切れていないか、防火扉の前にもものがおいていないかを点検されていた。体験型展示が多くあるからこそ、正しく動く状態になっているかの確認をする必要があるのだと感じた。

講話では、科学館学芸員の在り方、科学館の運営などについて学んだ。大阪市立科学館では、本物の体験を重視しているため、体験型の展示が多くあることを再認識した。さらに、人間とのつながりを組み込んでいくことで、来館者が人間との対話を通して現象をより楽しむことや、理解することにつながると感じた。また、学校での勉強の違いとして、到達目標が設けられていないということが自分にとっては新しい視点であった。このことによって、来館者それぞれに合わせた学びが可能になると感じた。

6-3. ギャラリートーク

ギャラリートークでは、展示を1つ選び、来館者にその展示の見方、使い方、その価値（面白さ、意義）を伝えるということを行った。展示場を見学している際に、展示の見方、使い方が分からず素通りしている来館者の方を見かけたこと、大学での専攻分野に多少関連のある内容であったことから、解説する展示として、3階の「ガラスと水晶を見分けよう」という展示（写真1）を選んだ。

まず、展示の意図や使い方、さらには魅力、価値をしっかりと理解することから始めた。肉眼では同じように見え、主成分も似ているガラスと水晶は、実は構造が違って、偏光板を通して見るとその違いが分かるというのが、この展示の意図の1つであると考えた。さらに、水晶に目玉のような模様が見られ、それが結晶の成長方向を表しているということも展示の魅力であると感じた。



写真1. 「ガラスと水晶を見分けよう」の展示

次に、実際に展示の前に立ってギャラリートークを行った。初めは、話しかけるタイミングや相手がどれくらい興味を持っているのか、1人でじっくり見たいのかといった判断が難しいと感じた。そこで、偏光板を通してガラスを見たときの模様のインパクトが大きいため、そのタイミングで、構造が違うので見え方が違うということを説明するように工夫してみた。さらに、話した後の来館者の方の反応を見て、おもしろいと感じられてそうであれば、水晶の結晶が成長する方向に目玉の模様は見えていることを説明するようにした。自分で調べた内容を一気に話すのではなく、相手の反応を見ながら小出しにしていくことで、一方的に話してしまうということとはなくなると感じた。また、サイエンスガイドの方が天井にあるガラスと水晶の構造模型（写真2）を指しながら、来館者の方に説明されていたのも、参考にさせていただいた。構造が違うとだけ説明されても、イメージがしにくい模型を見てもらうことで、理解してもらいやすかったと思う。学芸員の方の提案で、実際にガラスと水晶の球を手で握って、どちらが冷たいと感じるかを確かめてもらうということも行った。どちらも温度は同じであるが、熱伝導率の違いによって、冷たさが違うということ、わかりやすい言葉で正確に伝えることが難しかった。また、小学生に対しては、原子という言葉が小さい粒子という風に言い換えて説明するといった工夫もした。関連する展示が近くにあることを活かした、ギャラリートークができればより良かったのではと考える。導線的に水晶の結晶を見られていた方が多かったので、結晶の成長方向については関連のある展示も用いて説明できた。ただ、この展示を見てもらった後に、ガラスの展示へと誘導することがあまりできなかった。また、偏光板に興味を持たれる方もおられたが、自分の知識が浅く説明するのが難しかった。かみ砕いて説明するためには、自分がしっかりと原理などについて理解しておく必要

があると感じた。初めは、知っていることを一方的に話してしまいがちであったが、徐々に相手の反応を見て、説明を小出しにすることができるようになっていったと思う。

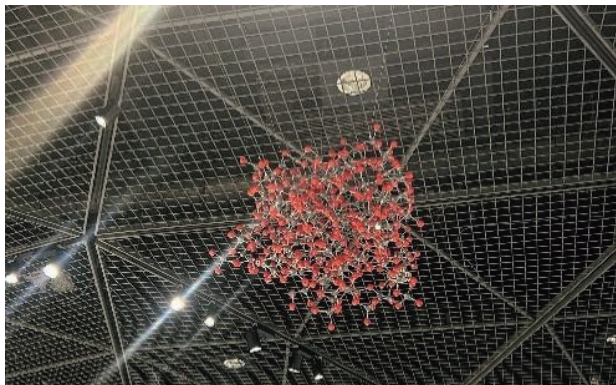


写真2. ガラスの構造模型

6-4. 最後に

今回の実習の目標として、科学館ならではの展示や体験型展示の管理における工夫を学ぶこと、また、科学館における学芸員の業務について理解を深めることを設定した。関連するものを近くに展示していること、リアルな現象を体験してもらうために現象型の展示が多くなっていることを学ぶことができた。また、ギャラリートークを通して、現象を楽しんでもらうだけでなく、理解してもらうために、人と人との対話が重要であると感じた。科学を来館者の方に楽しんでもらう、きっかけをつくるということが科学館の学芸員の役割の1つであるのではないかと考える。さらに、展示の魅力、意義を伝えていくためには、展示内容に関する専門的な知識だけでなく、来館者の方の興味や理解に応じて、分かりやすく説明する能力も重要であると感じた。実習を受け入れてくださり、ご指導いただいた大阪市立科学館の皆さまに深く感謝したい。

7. 実習生 鷲尾心純の報告

7-1. はじめに

私は以前から博物館学芸員という職業と科学全般に非常に興味があったため、大阪市立科学館の博物館実習に参加させていただき、学芸員やボランティアの方々のお話を伺ったり、ギャラリートークを行ったりした。これらを通して博物館施設で働くうえでの実態を知ることができた。以下にその内容と感想を報告する。

7-2. 始業点検

学芸員の方々に同行させていただき、館内の始業点検の見学を毎日行った。展示物に不備がないかの確認、モニター等の電源入れ、非常扉が正常に作動するか確認、サイエンスショーのモニターの準備、非

常通路の確認などが行われていた。展示物に不備が見つかった際は、不備を発見した学芸員自身によって修理される様子を見学することができた。2階では子どもたちが装置を本来通りに使えるようにボール等の位置調整が行われていて、来館者のための工夫を見ることができた。

7-3. 講義

サイエンスガイドのボランティアをしている方々や、学芸員の方々の講義を受けさせていただいた。

サイエンスボランティアの方々からは、疑問を持っていそうな人を見つけて積極的に声をかける、相手の視界に入ってから声をかけるようにするなどの来館者に声をかける際のポイントを教えていただいた。また、ボランティアのリーダーの方からは、“食わず嫌い”をなくするためにボランティアの方々の配置を考えてボランティアを行う人も成長できるようにしているというお話を伺った。

学芸員の方々からは、ギャラリートークを行う際の心構えなどを伺い、来館者が一目見て分かるものよりさらに一段階上の気付きを与えたいという気持ちであることが分かった。また、こちらから話したい気持ちを抑えて来館者の疑問に沿って話を広げるようにする、何よりも笑顔を大切にするなどの注意点も伺うことができた。

7-4. サイエンスショーとバックヤード見学

偏光板をテーマとしたサイエンスショーと、ショーで使用する道具などが収納されているバックヤードを見学した。サイエンスショーは参加者の興味が続くように実物や実演を多く見せるなどの工夫が見られた。その後、今回のショーを担当した科学デモンストレーターの方にお話を伺い、大人でも楽しむことができるように言葉遣いを子ども向けにしすぎない、何も知らない人でも理解できるように例示を用いて説明するようにするという工夫を知ることができた。バックヤード見学では、サイエンスショーのための器具を実際に見せていただき、ショーのために常に7つほどの実験が用意されていることを知った。

7-5. ギャラリートーク

実習3日目にギャラリートークの練習を行い、4日目から最終日にかけて実際にギャラリートークを行った。

実習3日目はまず事前準備のない状態でギャラリートークを行い、今より多くの知識を身に付ける必要性と、来館者の知識量と知識欲の個人差が大きいことを実感した。その後、インターネットや書籍を用いて自分が担当する展示について調査し、再度ギャラリートークを行った。私が担当した星の三次元構造についての展示は、その見方が分からないという来館者が多く、ほと

んどがその説明のみで終了した。

翌日からのギャラリートークでは、前日に練習した内容を活かしながら来館者に展示の魅力を説明することができた。時折、声をかけるのをためらってしまう、声のトーンが低くなってしまうなどの課題が見つかったが、実習生同士で意見交換をしたり学芸員の方にアドバイスをいただいたりしながら改善した。また担当している展示だけでなくその周囲の展示にも興味を持ち自主的に調査することで、より多くの来館者により多くの魅力を伝えることもできた。最終日にはこれまでの振り返りとして学芸員の方々の前でギャラリートークを行い、豆知識などもはじめのころと比較してスムーズに披露することができ、自身の成長を実感した。

7-6. 最後に

科学館や博物館施設全体の内情を伺うことができただけでなく、ギャラリートークを通して来館者の反応を直接見ることができ、やりがいを感じながら実習を行えた。ギャラリートークを重ねるごとに展示物の説明をした際に来館者から「面白い」という言葉を聞く回数が増え、そのたびにこの科学館の存在意義を感じられた。

今回の実習を経て科学への興味がさらに増したとともにそれを誰かに伝えることの楽しさを感じられたため、実習で学んだことを活かして科学の魅力をより多くの人に伝えていきたい。

8. おわりに

以上、2025年度の大阪市立科学館の実習について、その実施について当事者の実習生の報告を掲載した。

これら報告を通じてわかるのは、科学館という館種についての事前の学習が大学によってまちまちであり、しばしば全く行われていないことがあり、館長や学芸課長の講話、学芸員の業務を見たり、対話を通じたりして、多くのことを学んだことがうかがわれる。

一方で、実習生が持っている大学生の現状や情報などは、博物館に強い興味を持っているお客様代表として参考になることが多い。

また、ギャラリートークについては、多くの実習生は知識を伝達するために、説明を考え、説明する。と考えていたことが分かる。しかし、実際に来館者と接していて、まず振り向いてもらうこと、来館者の興味関心、知識レベルにあわせて話すこと、そのためにはよく学び、話すために十分な準備をしなければいけないことを、学んでいることがうかがわれる。また、そもそもの資料の価値を相当深く知らないと、適切なギャラリートークができないことに気づいたこともうかがわれる。

ただ、それを認識するタイミングが最終日であったり

することもうかがわれ、次回からの実習でより改善を試みる必要がある。

また、実習生とはこの研究報告の原稿のやりとりを行うことで、実習後の振り返り之行ってもらい、実習後もコネクションを持ちやすいように配慮をしたつもりだが、毎回とりたてて追加の交流は生まれていないが続いている。遠隔地から実習に参加し、また年度末は卒業や修了にむけての活動があったり、就職や進学で環境が変わったりするため交流が切れていることもあるのであろうが、一週間程度の実習期間では科学館を身近に感じられていないのかもしれない。これはもったいない話であるので、定期的の実習参加者と交流する機会を作る必要も感じている。

なお、本実習は科学館の学芸課を中心に、職員やスタッフ、ボランティアの協力、参画の元で行われている。実習についてはあとで多少のコメントをいただいているが、より拾い上げて、トータルで実習が実習生にも科学館にもより有益なものとなすべきであろう。



写真3. ギャラリートークの様子



写真4. ギャラリートークの様子



写真5. ギャラリートークの様子



写真9. 最終日の発表会の様子



写真6. ギャラリートークの様子



写真10. 最終日の発表会の様子



写真7. ギャラリートークの様子



写真11. 最終日の発表会の様子



写真8. ギャラリートークの様子



写真12. 最終日の発表会の様子



写真13. 最終日の発表会の様子



写真14. 最終日の発表会の様子



写真15. 最終日の発表会の様子